

佐賀県立博物館報

佐賀市城内 1丁目15番23号 TEL 0952(24)3947

No.37

梧竹中林隆經登富士山時年七十有二書立
 鎮國之山

明治三十一年歲次戊戌七月吉日肥前國



これは、中林梧竹（1827～1913文政10～大正2年）が明治31年7月富士山頂上浅間神社奥宮（静岡県富士宮市大宮宇櫻ヶ丘）に建立した銅碑（碑面 212.0×60.5）の拓本である。力強くどっしりした書体で古隸の味わいが深い。

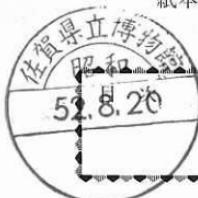
富士山を仰ぎみるようなすばらしい章法である。梧竹はこれを書するため8日間山頂に宿泊し、金明水を以て数10枚を揮毫したといわれる。この銅碑の建立にあたっては、当時の飯田市を中心とした富士講の人々が自発的に揃金し会員自ら銅碑を山頂まで運搬したといわれる。銅碑はその後、落雷で破損したが昭和42年7月カルビス社長の三島海雲（1878～1974）が東京で修理し復原したものである。

この銅碑の筆者中林梧竹は佐賀県小城町の生まれで下部鳴鶴（1838～1922）嚴谷一六（1834～1905）と共に明治の三大書家の人であるが、特に別格として明治の書聖と称せられた。

清国に2回渡り秦、漢、魏、六朝書道の研鑽に励むとともに中国各地を巡って古碑残石を尋ね碑本法帖の収集につとめた。帰朝後は東京伊勢幸に寄寓し銀座の書聖として敬慕されるとともに明治の新書風の先達をなした。

富士山頂「鎮國之山」銅碑拓本

紙本 140.5×60.0



- | | |
|-----------------------|------|
| ● 鎮國之山..... | 1 |
| ● 梧竹生誕 150年記念展紹介..... | 2～3 |
| ● 佐賀県内所在の梧竹筆碑石..... | 4～15 |
| ● 博物館日誌・行事のお知らせ..... | 16 |

梧竹生誕150年記念展

8月20日(土)→9月11日(日) 会期中無休

- 会場／佐賀県立博物館（佐賀市城内一丁目15-23）
- 主催／佐賀県・佐賀県教育委員会・佐賀県立博物館・佐賀県書道教育連盟・佐賀新聞社
- 後援／小城町・三日月町
- 観覧料／大人200円(150円) 大・高生100円(80円) 中・小生50円(30円)



80代の中林梧竹翁
神戸市観訪山「一力」より
中林家へ贈られたもの

●主旨

近代日本の代表的書家である中林梧竹の生誕150年を記念して特別展として県内外を問わず未発表の遺作を中心に、その代表的作品を一堂に集め、一般の鑑賞に供するとともに書聖梧竹の生涯をかえりみ、その遺業を讃える。

●展示内容

篆書・隸書・楷書・行書・草書・画ならびに拓本遺品など約150点を年代別に展示する。

●講演会 8月20日(土)・27日(土)・9月3日(日)

いずれも午後2時より

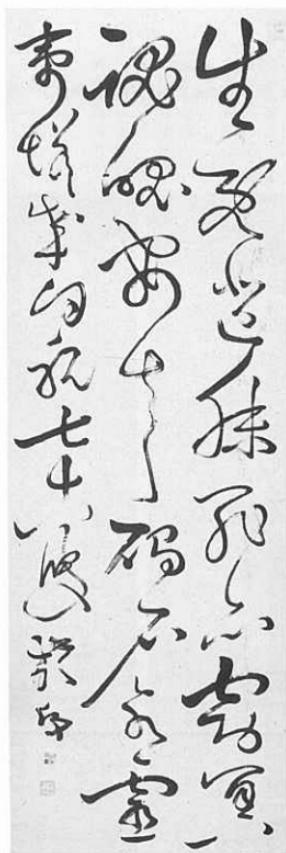
●図録の発行 出品作品の写真入り解説書

●年譜

文政10年	1827	1歳	4月19日肥前国小城に生まれる。
安政3年	1856	30歳	江戸より帰藩(27歳)、藩校の指南役となる。
明治11年	1878	52歳	清国駐劄長崎理事府初代正理事介元眉長崎に着任。以後余元眉に並んで受ける。
明治15年	1882	56歳	清国に渡り、藩存に師事する。
明治17年	1884	58歳	帰国し東京銀座・伊勢幸に寄寓し爾來29年間銀座の書聖と敬慕される。
明治24年	1891	65歳	17帖臨書を明治天皇に献上する。白羽二重の御衣を賜わる。
明治30年	1897	71歳	清国に渡る。帰國後は再び伊勢幸に寄寓する。
明治31年	1898	72歳	富士山頂「鎮国之山」の銅碑を建立する。
明治37年	1904	78歳	東京薬王寺に寿塔を建立する。
明治41年	1908	82歳	三日月村に觀音堂・梧竹村莊完成する。皇后陛下から宝帳を賜わる。
明治45年	1912	86歳	10月、中風を発し左半身不隨となる。
大正2年	1913	87歳	5月、三日月村に帰郷。8月4日死去。三日月村長榮寺に葬り、分骨を薬王寺に納める。



「耀朗暉義」扁額 紙本42.0×148.0



寿塔成自祝書（七十八歳）
紙本一四六
五×四九・五

燭魂死生
石魄亦既
氣安窓道
靈真冥殊

寿塔成自七十八歳書

梧竹は、明治37年78才の時東京の日蓮宗妙莊山薬王寺（港区三田4丁目4の23）に寿塔を建立した。この書は、この寺の住職顕良師の請いによって書したもので、暢達で典雅な趣がある。梧竹の師、山内香雪（1799～1860）の墓地はこの寺にあり、その回忌には必ず墓参していたという。そして香雪の墓碑の真向いに寿塔を建立し、ここを「比れ吾の永宅なり」とした。大正2年8月4日郷里の三日月村「三日月堂」で没すると分骨は、この寿塔に納められた。



富士山図画賀（八十歳）
絹本着彩・二八・五×二九・〇

容日下蓮
蓮華月界峯
吸可跡三万
坐當捫茫万
頤還取間偶

富士山を日本の象徴として愛した梧竹は、明治31年72才の時、山頂に「鎮國之山」の額牌を建立し、以来少なくとも7回は登山したといわれる。印章にも「蓮峰倦人」「梧竹一號蓮峰」「蓮峰花峰」「蓮峯仙人」「日出處」や富士山の絵を画したものなどがある。また「蓮峰」「蓮峰倦人」などの別号の署名もある。

この絵は、絹青の山肌が鮮やかであり、雄々しい富士の姿を大胆にとらえている。落款印章に「八十叟」とあるが、故中秋梧竹翁畧年譜（佐々木盛行編）によると「丙午八月三十日夜宿富士山頂三十一日帰京」とあって、明治39年8月30日登頂、31日下山帰京して書したものであることが解る。

佐賀県内所在の梧竹筆碑石

佐賀県立博物館では梧竹生誕150年記念展にともなって、県下の梧竹筆碑石の採拓にあたった。12ヶ所 13件を40枚で取扱し22幅におさめた。以下、拓本解説の①は所在地②題字③撰文、書写又は建立年代、④碑の規模⑤その他参考刻銘数字はセンチメートル、たて×よこ×高さを示す。

I. 顯彰碑

1. 多久茂族碑



多久茂族碑

明治十七年十二月廿二日田多久邑主多久公卒於佐賀水江館邑之士民哀悼如喪父母既歲在於大慶山寺大祥事畢追慕不已相語曰自公義祖天理公來治干此矣世休養三百載義称君臣恩實父母追公時雖學士奉陪不至此乎靈堂忽然于斯乎神宗會曾紀祖宗以一鄉子之鎮宜配祀以永祈斯民福社因請之縣縣知事鍛田景弱具狀請朝廷竟配食神社蓋邑人之志也公諱茂族號永翠水江龍造寺定翁公十四世孫也龍氏本姓藤原為肥前望族居佐賀城至定翁公授之長子家和更城水江自居焉季子剛忠公來其後而傳之春雲公世称之水江龍造寺方是時尼利廟府失政海內亂龍氏助少貳資元逆破大内氏之兵威振肥筑少武族馬場賴周深嫉之陰嗾少貳誘殺龍氏宗族殆盡剛忠公大怒立戮賴周以國興復時年既耄臨終遺命曰曾孫長法師倘能知吾志今令為僧宜蓄髮嗣水江以傳其弟慶法師曾本宗龍造寺胤榮殿而無嗣衆推長法師為後慶法師直承水江此為天理公長法師諱隆信善用武征服四鄰疆域跨五州天理公常參禮數多所計畫後遷多久城鎮其西北嗣子天叟公從豐臣討征韓之軍有戰功追徳島府新興島氏藩封天叟公因為藩老改稱多久氏屢奔走關東一身任藩務上下賴以安惠溪公代父執藩政島原之役卒謫下土合藩兵隨原家玄山公好文士民公化爲風民唱和自率自率以鹽革財務考梅溪不擇家声十二世桂公此爲公祖時昇平已久奢侈爲風民困憊乃僉勤自率以鹽革財務考梅溪公天資穎敏年十六執藩將大有所爲不幸早卒公勤淨嗣家及長好學愛士一鄉風靡然而興嘉水戌申從藩主巡視長崎迎防癸酉魯國使至長崎甲寅和蘭國使及英國艦尋至公每督家士出備邊警備府特賜時服賞勞方來國使率軍艦追江戸乞互市羽櫻東海内驟見之安政乙卯公抵江戸久甲子又使于京師肯係時事變應丁卯德川氏解政權皇室中興翌戊辰改明治有伏見之役尋主帥東征公直赴江戸率藩兵及麾下士卒大澤鎮撫野州城據藤原險防戰累日七月大總督有橋川宮下令以公任白川口參謀公進帥與坂垣助退伊知地正治謀刻日並進薄若松城城主松平客保固守不降合圍三旬諸軍遂征巨煩公独奮並匪謀築塹呈大塹山窮射連日屢挫堅壁晉如蜂巣城中遂行營居九月廿三日客官出城降兵先是以公調練之是日襲破兵多取洋式大小武器皆獲之總督府之泰西所費巨萬有司告以賈財不給公不省至此其衆服其先識十月公以手兵手盾送各客子致之總督府十一月公入京朝御拜天廟有實賜大綬督官亦賜寶力綱帛十二月召拜新事仕出已巳六月賜黃金千両蓋追賞東征之功也翌月勅任少辨叙從五位半未疎長肥土諸藩主建議奉還敕牒公首贊之九月任浜松県權令壬申五月伊万里県權令是月伊万里県更稱佐賀県明年掛冠養病鄉里終不起享年五十一年配鍋島氏生男二女有淑德庶子五男一女愛育之異已出嫡出三男一女庶出二男一女先公没配亦繼公卒長子茂發君柔後鳴呼公承三百年之祖業際會中興之運擢身朝班勲業赫奕永錄大史故爰叙其世系之概係以銘曰

鼎業顯世 息渢草民 公雖云逝 有神不泯
明治二十一年三月 內大臣從一位大勳位公爵三条実美碑表題字
元老院議官從三位勳一等鶴田皓謹撰文 中村隆経書

帷幕之下 松柏聳蒼 祖孫廟祀 水護此鄉

- ① 多久市多久町東ノ原 多久神社境内
- ② 碑表に「從五位多久茂族碑」(陰刻、三条実美筆)とあり、他三面に鶴田皓の撰文がある。
- ③ 明治21年3月(梧竹62才)楷書陰刻
- ④ 墓台 358.0×450.0×64.0 椎円形の土壇に一段方形石がある。身高252.0 幅89.5(縦籠変岩)銘帶裏面228.0×89.0 横面228.0×40.0
- ⑤ 台石に「石工 砥川村武富傳次郎平川米吉」とある。

多久茂族(1833~1844天保4~明治17)は多久第11代邑主で、藩命により長崎警備、長州征伐 戊辰戦争で功があり、浜松県權令、伊万里県權令となる。

題字の三条実美(1837~1891)は公卿で太政大臣、内大臣、一時は内閣総理大臣を兼務した。

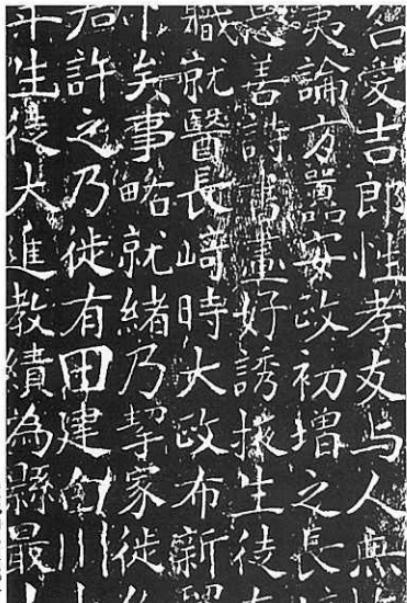
撰文は鶴田皓(1835~1888) 多久出身、ヨーロッパを視察し、わが国の刑法をはじめ諸法律の編纂に力を尽した。

なお「水江事略卷之十八」によるとこの碑は明治22年多久旧士民によって建立されている。



2. 江越礼太碑

江越如心之碑



肥前有君子曰江越君諱道容字如心通稱禮太明治維新材能之士或顧君黜退教授有田改世人不能說建石記其德君小城藩士祖者諱道春無子養山領某配長女為嗣是為考諱順文政了亥生君初名吉郎性孝友與人無忤幼受業佐草場輝嘉水辛亥遊江戶入古賣增之時當歐米襲弱至攘夷論方為安政初增之長崎之下田庄接露使君施行祭世變旁學英語而歸君濃眉長目言動和易敏思善書畫誘徒生焉而施教業於松浦下肥原爲施教慶雲也大政奉行長崎時大政被廢而歸君隨之正方仕於是昂然而立遠瞻聞山代都鄉喜樂謂松浦下肥原爲足富天下矣事略就緒吾乃挈家徙久原傍教書生既而遷施慶雲中繼事祖也止迺學令新布有田人因創小學請君爲師君許之乃從有田建白川小學校科數年更使生徒校舍傍築小窓以餘課授泥捏泥塑紅絲粗火化之序數年生徒大進教績爲異最十年博覽會賞曰教產陶地少年用意甚厚當是時香蘭精礮相繼興有田陶業較盛而盛君所教之子弟育長十三年又因工芸校君始有家資三百六十餘圓盡捐以自先逐至東京施設方朝野知君者咸義之君於是建廈修學舍以資力未備而中小學制俱不六年縣特以君爲小學校長一等訓導尚非君志也君性恬淡貧乏但爲公利忘私計循福不厭其細調製藝術以疏高遠遺時否寒舍學不興因絕不業日告可以小學教師終身乎哉以子弟恐父慕不忍遺之猶提小學又八年卒以老辭職放遊長崎翌廿五年一月卅一日病不起歲六十六薨十日川谷娶妻次井氏生四男一女長子孝太郎嗣次米次即利恕次二三女承君之二十年間所薦陶子弟森々住在笠置上苟欲資以興必非闢發智能俱相結合則不可得君所樹之志業如金石不鏽厥身雖永不磨滅也

江越礼太(1827~1892文政10~明治25)字は如心。小城生まれ、わが国の陶業教育の先駆者で、有田白川小学校初代校長。また附設の「勉修学舎」長として工芸教育に力を入れた。

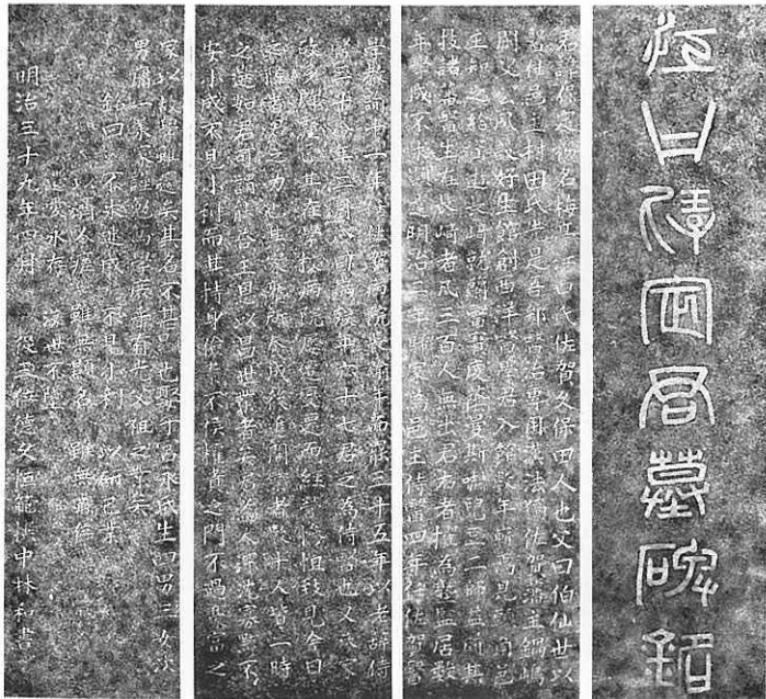
題額は鍋島直虎（1855～1925）小城第11代藩主で本藩直正2男)戊辰戦争に功あり、小城藩知事、ロンドン留学後外務省御用掛のち貴族院議員

撰文の久米邦武(1839~1931)は佐賀生まれ。岩倉大使一行に随行して米欧に渡り、のち文科大学教授となりわが国で最初に古文書学を講義した。

なお、この碑の西隣には大隈重信題額「深川君之碑」（深川榮左衛門）撰文久米邦武、西岡透明書（宮龟年刻）がある。また陶山神社の扁額「陶山社」(116.5×216.5)は「明治己卯六月吉旦源隆経謹書」とあり当社の拝殿にかかる。見事な木額である。



3. 江口保定碑



- ①佐賀郡久保田町徳万 竜洞山大雲寺（曹洞宗）境内
 ②碑表に「江口保定君墓碑銘」（陰刻篆書）とあり他三面
 に顕彰文がある。撰文は徳久恒徳
 ③明治39年4月（梧竹80才）題字は篆書、文は楷書陰刻
 ④礎石 100.0×100.0×100.0 方形石壇に二段組方形
 台石がある。身高 126.0 幅36.0（安山岩）銘帯 126.0
 ×36.0
 ⑤台石に「建立者門人 三野原玄業」外9名を連記してい
 る。

江口保定（1905 明治38年没 67才）は久保田生まれ。
 長崎でボードウイン・マンスヘルドに西洋医学を学び、
 のち久保田邑主の侍医、郡立佐賀病院長（好生館）となる。

撰文の徳久恒徳（1845～1910）は佐賀市生まれ。富山、
 香川、熊本、広島の各県知事のち錦鶴間紙侯、貴族院議員、武徳会々長。

君諱保定初名梅亭江口氏佐賀久保田人也父曰伯仙世以医仕邑
 生節創西洋医学入館數年新焉見頭角色王鶴島醫叟公夙設好
 蘭賓度蔓斯諾兒豆二師益研其技諸藩医生在長崎者凡三百
 人無出君右者推為塾居數年學成不求顯明治二年始家為邑
 主侍医四年任佐賀医学教諭一年任佐賀病院長踰年而罷三十
 五年以老辭侍医三十八年二月八日病沒年六十七君之眷侍医也
 又參家改多所療正其在学校病院屢遭委遷而經營當慘報致見今日
 之隆者君之力也其家塾所養成後進開業者數人皆一時之選如
 君可謂能營主以昌世業者矣君為人深沈寡默不妄小成不見小
 利而持身儉素不候權貴之門不過豪富之家以故學雖遠矣其名
 不遺孤于宮氏生四男三女次男庸一娘家譜勉篤學庶乎有
 光父祖之業矣

銘曰 不求速成 不見小利 以研己業
 以濟人癒 雖無顯名 雖無爵位
 道愛永存 没世不墜
 從三位徳久恒徳範撰 中林和書

明治三十九年四月



谷口藍田碑部分

藍田谷口先生碑
從二位勲二等子爵鍋島直彬篆額

從二位勲一等男

細川潤次郎撰文 中林隆經書
藍田谷口先生没後既五年矣門人相議碑介令嗣豐五郎求余文余寺先生四十餘年知先生頗悉誠不可辭也先生諱中大明藍田其号號肥前有田人幼有異稟受業於勇氏清水龍門有神童之目及長遊豐後學於庄淡窓者三年更遊江都主羽倉簡堂者亦三年屢訪古賀側蕙佐藤一齊佐久間象山諸先輩聽其緒論又與伊東玄朴鈴木春山等交得藉以通外國事情業成而歸于長崎以下帷授経治元年伏見之役起先生將效力王事與大隈重信之京師又歷江都至野州視官車与威相持之狀偶得疾而歸及疾稍平復寓于長崎鹿島藩主鍋島直彬君請先生爲弘文館教授兼権大參事及藩廬復萬千長崎長崎人設壇林館先生爲館主來學者會鹿島人亦設義塾以遞先生生率其徒而行私塾授経十年許生徒成彬彬可觀二十三年遊東京門人恩地轍興高崎五六等設篤信學會乞先生教亡幾熊本師團長能久親王召先生至熊本使先生說經及親王転大帥師團長從而徒爲親王學問間所由是先生教于小松宮親王亦招先生講及久親王薨自建藍田書院授徒三十五年十一月十四日病沒年八十又一葬于青山墓地配秋水氏賢明有淑行先後有五男七女曰精次曰研太郎次曰彦三次曰復四郎亦先沒第五子五郎家明治中與後世人多詠洋書如六經四子率爲録三千餘人先生講學爭講古書畫論爲貴云先生無意于守皇國之大道敷忠孝之正教放言皇國之道與孔子之道合孔子之言我皇道之註疏也先生於經無所不窮而尤遠於易理其誦易不下八九千遍自壯游人老而不倦弟子著錄三千餘人先生講學爭講古書畫論爲貴云先生無意于用世而暇則出游足跡所及東至北海道西至沖繩縣南至紀伊北至加賀到所爲人講說經義又賦詩作文以自娛所又有吹雪遊稿千卷五郎鉄其十一上梓藍田遺稿也是講義錄及日記數十卷皆未刊行先生墓在青山而門人建碑於鹿島城址以先生釋褐之地魂魄之所當眷焉也

銘曰
先 生 施 教
說 經 賛 繼
春 風 入 座
民 在 三 之 義
師 嶽 道 尊
聞 斯 風 者
薄 夫 可 敦
廣 不 過 溫
無 支 離 言
葉 育 才 俊
純 誠 不 絶
典 型 永 存
以 紀 師 恩

①鹿島市鹿島町高津原 旭ヶ丘谷園内

②篆額に「紀恩之碑」(陽刻 鍋島直彬筆)とある。撰文は細川潤三郎

③撰文の期日は明記されていないが「藍田谷口先生全集 卷五、細川十洲撰 藍田谷口先生碑」によると「明治39年7月」とある。(梧竹80才)楷書陰刻

④礎台 283.0×400.0×100.0 方形石壇に二段組方形台石、身高 285.0 幅 137.0 (安山岩) 銘幣 216.0×119.0

⑤右横面に「鹿島子爵家ヨリハ、特ニ金壹百五拾圓ヲ寄セテ此拝ヲ賞セラレタリ」

左横面に「明治四十四年十一月聖駕親臨閏武於肥筑之野其月十五日特旨贈正五位 門人筆記」と異筆の刻銘

がある。

谷口藍田(1822~1902文政5~明治35)は有田生まれ。学者、鹿島藩の弘文館、長崎瓊林館で漢学、英学を講じのち鹿島義塾長、また藍田書院を開いた。

篆額の鍋島直彬(1843~1915)は鹿島第13代藩主。沖繩初代県令、元老院議員、貴族院議員正二位勲二等。「古今の名君にて鹿島の今日あるは悉くこの公のおかげである。」(鹿島市、中巻)

撰文の細川潤次郎(1834~1923)は法制学者、教育家。女子高等師範学校長、枢密顧問官兼華族女学校長、古事類苑編纂總裁、貴族院副議長などを務める。